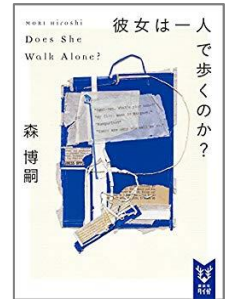


140字の読書界

地歴科有馬おすすめの「未来について考える」本

- 1 書名：彼女は一人で歩くのか？
著者：森 博嗣
発行：講談社タイガ

小説の舞台は、人間と、人工細胞から作られたウォーカーロンという生命体が共存する200年後の世界。肉体を機械化し、人工細胞を取り入れて何百年もの寿命を得た人間には、「人間とは？」「命とは？」という問いがつきまとう。生命科学や人工知能の発展した未来の仮説を楽しめる物語のシリーズ第1作。



- 2 書名：スモールハウス ——3坪で手に入れるシンプルで自由な生き方
著者：高村友也
発行：ちくま文庫

10万円たらずで自作した3坪の小屋で暮らす著者による本。過剰な消費社会に背を向け、土地代・建物代・住宅ローン・固定資産税など金銭的負担から自由になり、シンプルで余裕のある生活を営む世界各地の新たな潮流を紹介。実際の小屋作りや生活の様子は、同じ著者の『自作の小屋で暮らそう』に詳しい。



- 3 書名：スーパーヒューマン誕生！ 人間はSFを超える
著者：稲見昌彦
発行：NHK出版新書

著者は、人間拡張工学が専門の東大教授。「人間は身体の限界を超えられるのか？」をテーマに、SF作品など豊富な具体例を用いて説明。身体と道具、身体と外界との境界線は、意外に曖昧で、著者は研究成果をもとにその境界線の引き方を揺さぶる。VR、AR、SR、MR... 現実(R)って、何なの？



- 4 書名：マルクス・ガブリエル 欲望の時代を哲学する
著者：丸山俊一・NHK「欲望の時代の哲学」制作班
発行：NHK出版新書

気鋭のドイツ人哲学者の、日本滞在時のフィールドワークから紡ぎ出された言葉などを綴った本。後半に「技術を獲得した果てに人間はどこへ？」をテーマに、ロボット工学者の石黒浩教授との対談を掲載。ヒューマノイドを容易に受け入れる日本と、認めないドイツの違いなど、興味深い対話が盛りだくさん。

